

## 平成24年度重点プロジェクト事業（海外派遣研究員等旅費）報告

# 59th Annual Meeting of American College of Sports Medicine における研究発表

前大純朗\*

### はじめに

今回、平成24年5月29日～6月2日の日程で、アメリカ合衆国サンフランシスコにて開催された59th Annual Meeting of American College of Sports Medicine（第59回アメリカスポーツ医学会：以下、ACSM）に参加し、これまで我々が行ってきた研究成果の一部を発表する機会を頂いたので、学会大会の様子および私の発表内容について、ここに報告する。

### ACSM について

ACSM は、約4万5千名以上の会員を擁し、年に1度の学会大会には毎年5千名以上が参加するなど、体力・スポーツ医科学の専門分野における世界最大級の学術団体である。事実、私が今回参加した第59回大会においても、参加者は過去最多の6000名以上という報告があり、学会会場は、スポーツ医科学を研究領域とする研究者や学生をはじめ、医師や運動指導者、および実践者等の参加者で非常に盛況であった。



学会会場（Exhibit hall）の様子

学会大会では、ACSM が開催している「ACSM's 3<sup>rd</sup> World Congress on Exercise is Medicine」も同期間・同会場内で行われており、一般発表に加え、「Memorial lecture」、「Keynote lecture」、「Named lecture」、「President's lecture」など、各分野における著名な研究者のレクチャーやシンポジウムなどの講演が、学会期間中、朝8：00～夕方6：00まで隙間なく行われていた。それらの内容はいずれも興味深いものであり、1つの講演への出席者の人数は、多いものでは1000名を優に超えるものもあり、私がこれまでに国内で参加した学会との規模の違いに、強い衝撃を受けた。



講演会場の様子

上述の講演に加え、希望者は、早朝に開催された「12<sup>th</sup> Annual Gisolfi Fun Run」や、「Cardio Tennis Workout」などの実技系の運動プログラムにも参加することができ、スポーツ関係の学会にふさわしく、参加者は早朝から笑顔で汗を流していた。また、学会中間日（5月31日）の夜には、「International reception」という、アメリカ国外からの参加者を対象とした交流パーティーも開催さ

\*鹿屋体育大学大学院体育学研究科

れ, 私を含め, 参加者らは様々な分野の研究者と知り合う機会を得ることができた.



International reception の様子

### 研究発表について

私が今回発表した研究は, テーマが「Effects of resistance training with maximal voluntary co-contraction on neuromuscular function (Maeo S, Yoshitake Y, Takai Y, Fukunaga T, Kanehisa H)」であり, その内容は「拮抗する筋群の最大随意同時収縮によるトレーニングが神経筋機能に及ぼす影響」について検証したものである. その内容は, 「拮抗する筋群を同時に収縮させ互いに抵抗を掛け合うことで, 負荷を与えるための外的な機器や機材 (バーベルやダンベル, マシン等) を必要としない, 新しい筋力トレーニング方法が成立する」というものであった. 本研究による結果は, 筋力のトレーニングとして, これまでに認知されてきたものとは全く異なる方法の開発に繋がる非常に独自性の高いものと認められ, 多くの研究者の関心を集めた. 発表はポスター形式であったが, 大学院生のような若手研究者をはじめ, スポーツ科学に関連するジャーナルの編集委員を務める著名な研究者からも様々な質問を受け, 本研究の魅力・問題点・次の課題など, 様々な点について話し合うことができ, 非常に有意義な議論の時間を持つことができた.

学会会場内で使用された言語は勿論「英語」であるが, 私はカナダに留学の経験があり, 現在も英語の学習を続けているため, 特に苦は無く他国の研究者らとコミュニケーションをとることがで

きた. しかし, 「英語」といっても, 参加者は英語を母国語としないヨーロッパ諸国の人々も多く, また, 英語を母国語とする国の人々であっても, アメリカ, カナダ, イギリス, オーストラリア, ニュージーランドなど, それぞれの国で (厳密に言うと同一国内でも地方により) 訛りが異なるため, 聞き取りづらい・理解するのに時間がかかるなどの点を実感したこともまた事実であった. 上述したような理由から, 国際的に活躍する研究者を目指すうえでの, 英語の必要性を再確認することができたと同時に, 現在は, 一刻も早く本研究の成果を論文として国際的に公表し, 次の課題に取り組んでいきたいと考えている.

### 終わりに

今回, 私自身初の国際学会参加・発表ということもあり, 多少の不安はあったが, 自身の研究に関する様々なアドバイスや, 一般発表・講演から多くの最新知見を得ることができ, 非常に有意義な経験となった. 冒頭で述べた通り, ACSM はスポーツ医学関係では世界最高クラスの学会であるため, 来年度以降も毎年参加・発表することを目的として, 今後の研究に精を出していきたい.

最後に, 本学会大会への参加・発表にご理解とご支援を頂いたことに, 感謝の意を表します.